

1. 宮城県東松島市 視察内容：震災復興伝承館及びその周辺の復興状況

人的被害 死者 1,110 人 行方不明者 23 人 合計 1,133 人 (全住民の 3%)

家屋被害 全壊世帯 5,513 棟 大規模半壊 3,060 棟 半壊世帯 2,500 棟

(全世帯 73%)

避難者 (最大) 15,185 人 避難所最大 106 箇所 (2011.8.31 で閉鎖)

持続的に発展する「東松島市」の実現のために「復興まちづくり計画」と「環境未来都市」の 2 本の計画を同時に進行し、東松島市復興まちづくり計画 (平成 23 年度～平成 32 年度) では 2,000 人を超える市民参加のもと、10 年間の計画として作成しました。

防災集団移転促進事業 (将来につなぐ安全な都市づくりへ)

- ① 住民自らが望んだ「安全な集団移転地」
- ② コミュニティごと移転できる「地域の絆を重視した集団移転地」
- ③ 公共交通が至便「JR 駅の近く」「持続的に生活できる集団移転地」

市街化区域をコンパクトにし、かつコミュニティを維持した集団移転地を選定したため市外流失を抑えることが出来ました。

公営住宅も移転協議会等の住民組織との綿密な意向調査により、当初入居率 97%

野蒜地区の例では、野蒜まちづくり協議会を立ち上げ、野蒜市民センターを運営し集団移転後に設立された、8つの新自治会(2017年～)で地域の絆が生まれたが、実は震災前から築き上げてきた地域分権型の自治協働のまちづくりがその背景にあったようです。

また、震災ごみを手作業で19品目に分別する「東松島市方式」による災害廃棄物のリサイクルで被災者を中心とした市民800人の雇用も実現しました。

※震災の記憶と教訓を広く後世に伝えるための旧野蒜駅プラットフォーム(震災遺構)、祈念広場、震災復興伝承館を見学しました。被害(被災)先行型の後追い対策から災害が発生してからではなく、事前の対策(事前復興型)と準備が重要であると改めて感じた研修となりました。

2. 宮城県柴波郡矢巾町視察内容：フューチャーデザインによる水道料金の改定

2009年1月～水道サポーターワークショップを開始 2012年3月にワークショップ参加者から料金改正の提案(更新積立金200円)があり、2014年10月に矢巾町水道事業の取り組みがクローズアップ現代で紹介され、大阪大学の原先生からフューチャーデザイン(現代に生きる人々のみならず、まだ生まれていない、将来に生きる人々をも利害関係者として捉え、将来世代と現代世代の双方の視点を持って考えることで解決方法を見出す)の事を始めて知りました。

2015年7月に大阪大学環境イノベーションデザインセンターと共同研究の協定を結び「まち・ひと・しごと総合戦略策定でフューチャーデザイン」を実施し水道事業経営戦略策定でこの手法を採用し（基本料金の値上げ、水道管の更新サイクル70年と定めた。）

※水道事業の持続可能性を考えた場合、単に現在の事業の最適化を考えるだけでなく、将来水道を使用する人々の利益も考慮する必要があります。しかし、従来の合意形成のあり方では、社会的ジレンマは解消できても、あくまで現状の制約の中で議論されるため、そこから導き出される将来像は、必ずしも将来の生活者のための選択といえません。

これに対してフューチャーデザインは、仮想将来世代を創出することで将来の生活者の利益を代弁することができる手法であり、持続可能な水道事業を住民参加で構築していくうえで、フューチャーデザインがもたらす視点は極めて重要であり、これまでにない社会技術だと感じました。

3. 宮城県釜石市視察内容：震災復興後の持続可能な観光地づくり

東日本大震災で、死者・行方不明者が1,121人、全壊住宅が2,957戸という大きな被害を被った釜石市は、犠牲になった多くの市民への鎮魂の想いをまちづくりの出発点に復旧・復興の取組を市民一丸となって取り組んでまいりました。

震災からの10年で全ての復興事業を終えることが出来なかったようですが、今後も被災した方々の心のケアなどに取り組み、心の復興を果たし、市民一人ひとりが夢と希望

を持って生きいきと暮らせる「持続可能なまち」であり続けられるように観光施設の一部（釜石魚河岸にぎわい館「魚河岸テラス」、鵜住居駅前地区公共施設「うのすまい・トモス」、根浜海岸観光施設「根浜シーサイド」、箱崎白浜漁村宿泊施設「御箱崎の宿」、ワーケーション施設「Nemaru Port ねまるポート」）を「株式会社かまいしDMC」に委託し、観光地域づくり法人として、地域の持つ観光資源および地域産品の魅力を最大限引き出し、地域経済を活性化することを、そしてこの町で暮らす誇りを醸成することをミッションとしています。

釜石市が観光振興ビジョンとして掲げている「オープン・フィールド・ミュージアム釜石（屋根のない博物館）」の構想を実現することが、最大の役割との事で、より魅力的な観光地域づくりの手段として、世界持続可能観光協議会（GSTC）基準を取り入れ「世界の持続可能な観光地100選」（2018、2019、2020、2021年度）に選ばれています。

※市の観光コンセプトとしてオープン・フィールド・ミュージアムを策定し、人や生業を展示物として観光の中心に据え、サステイナブル・ツーリズム構築のために漁船クルーズ×マイクロプラスチックツアー、釜石ジオ弁当、語り部の研修プログラム化、防災プログラムのインバウンド受け入れ等の事業を実施し、震災復興に取り組んでいました。

座学終了後、うのすまい・トモスに立ち寄りました。この施設は「東日本大震災の記憶や教訓を将来に伝えるとともに、生きることの大切さや素晴らしさを感じられ、憩い親しめる場」として、複数の公共施設を一体的に配置し、地域活動や観光交流を促進する

鶉住居駅前エリアです。東日本大震災慰霊施設「釜石祈りのパーク」、防災学習施設「いのちをつなぐ未来館」、観光交流拠点施設「鶉の郷交流館」などで構成しています。

東日本大震災では、鶉住居地区の死者・行方不明者は580人に上り、市内の犠牲者のおよそ半数がこの地区の住民でした。「釜石の奇跡」として有名な防災教育の成果で小中学生が率先避難した一方、地域の防災センターに避難した大勢が亡くなっています。

ラグビーワールドカップで復興を世界に発信した鶉住居。まちが新しくなり、世代が替わっても、教訓をつなぐため地域一体で模索を続けているようすがよく分かる施設でした。

4. 宮城県盛岡市視察内容：ニューヨークタイムズで「2023 年に行くべき 52 カ所」に選ばれたまちづくり

盛岡市は中心市街地に歴史的な建物と川や公園などの自然があり、まちを歩いて楽しめるところや、コーヒー店、わんこそばのほか、書店、ジャズ喫茶などの文化が根付くまちであることが評価され、アメリカのニューヨーク・タイムズ紙（電子版）が令和5年1月12日に発表した「2023 年に行くべき 52 カ所」に「盛岡市」が選ばれました。

「盛岡市」を推薦したライターのクレイグ・モドさんが令和5年2月6日から9日まで盛岡を訪れました。

広報もりおか令和5年4月1日号では、モドさんから見た盛岡の魅力を総力取材し、

取材を通じて再発見した魅力の特集しました。

市は盛岡観光推進計画（令和2年度～6年度）に基づき各種施策を進める中で、ポストコロナ時代に起こりうる社会情勢の変化に対応するために、令和3年12月に「盛岡観光推進計画ポストコロナ時代を見据えたアクションプラン」を策定し、インバウンド需要の回復に向けた取り組みや通年型観光による誘客促進を進めてきたところでした。

そのような中で「2023年に行くべき52カ所」の2番目に盛岡市が選出されたことから、これを好機と捉え、盛岡の良さを再発見し広くPRするとともに、これまで以上に、国内外に魅力的な観光地としてより積極的なプロモーション活動と受け入れ態勢の整備を行っています。

盛岡 City WiFi の環境整備、デジタル観光マップの作製、祭り行事を体験・体感できる場の創出として定期的にさんさ踊りを観覧できる「街なかさんさ」の実施や山車運行期間中、山車に触れてもらう機会の創出など体験型観光にも力を入れ、観光庁の観光再始動事業にも採択され、市と県の連携にも取り組んでいます。

座学の後に「盛岡ふるさとガイド90分コース」を体験し、盛岡城跡公園周辺を散策しました。城下町の風情漂う、美しい街並みに心を奪われた研修となりました。